

活動と資料

COVID-19 禍における成人看護学実習の 実習方法と教育方法の工夫



横井 和美, 生田 宴里, 片山 将宏, 喜多下真里
小野あゆみ, 荒川千登世, 糸島 陽子
滋賀県立大学人間看護学研究院

要旨 新たな看護教育の構築に向けて看護学実習ガイドラインが作成され活用した教育が開始される矢先, COVID-19 禍において看護学実習が行われた。ウィズコロナへの対応に向けても COVID-19 禍で取り組まれてきた実習方法や教育方法の工夫の活用および看護学実習ガイドラインを活用して看護教育のさらなる質向上がはかれるように取り組む必要がある。そこで, 本研究では COVID-19 禍で取り組まれた成人看護学実習の報告文献や本学の成人看護学実習の実施状況から実習方法や教育方法の工夫を明らかにした。医学中央雑誌 Web 版を用いて, 検索式を「COVID-19 (コロナ) 禍 AND 看護学実習 AND 成人看護学」とし, 教育の工夫内容を記載した実践報告を含む 12 文献を対象とした。本学の成人看護学実習の教育の工夫においては, 成人看護学実習を構成する科目 (慢性期実習, 急性期実習, 終末期実習) ごとに, コロナ禍での実習期間, 実習形態, 実習方法を記述した。COVID-19 禍において成人看護学実習は, 対面での受け持ち実習ができない場合は紙上事例で看護過程を展開し, ICT を活用してオンラインで観察力やコミュニケーション力を鍛える工夫をしたり, 学内で様々なシミュレーションを実施したりして看護の思考や実践力を鍛える教育方法の工夫をしていた。また, 実習指導者や実習施設の他職種とオンラインや対面で協力を得ながら臨床の状況を学べる工夫を行っていたことが明らかになった。

キーワード 成人看護学実習, COVID-19 禍, 実習方法, 教育方法の工夫, 看護学実習ガイドラインの活用

I. はじめに

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2017 年) で示された臨地実習に関する課題には, 学生が担当する患者選定の難しさ, 学生が体験できる看護ケアの少なさや内容の制限, 臨地実習での経験を活かせる効果的な学修の連動等があり, 臨地実習の教育の内容だけでなく, 教育方法や実習科目の体制づくりにも関わる内容があった。そのため, 臨地における実習の指針となるガイドライン作成の必要性が示され, 2020 年 4 月には参照基準として位置づく看護学実習ガイドラインが発表された。看護学実習ガイドラインは, 2022 年度の新カリキュラムの開始に向け, 各大学でのカリキュラムの策定・改正や実習要項の作成・改変の際, または実習施設との連携・協働体制の構築に活用されることを意図していた。さらに, 実習施設の看護学実習指導に関わる者の実習に関するスキル向上にも活用されることを意図して作成された。

しかし, その矢先, わが国では 2020 年 1 月から新型コロナウイルス感染症 (以下 COVID-19 と略す) の感染拡大が始まり医療体制は大きな変化を強いられ, 看護学実習も実習施設の確保ができなかったり, 受け入れる実習学生の人数削減や病棟滞在時間の削減が求められたりするなど従来の臨地実習が行えない状態となった。これに対して 2020 年 2 月 28 日と 6 月 1 日に, 文部科学省・

Ingenuity of training methods and educational methods for adult nursing practice in the COVID-19 pandemic

Kazumi Yokoi, Eri Ikuta, Masahiro Katayama, Mari Kitashita, Ayumi Ono, Chitose Arakawa, Yoko Itojima

Graduate School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

2022 年 9 月 30 日受付, 2023 年 1 月 16 日受理

連絡先: 横井 和美

滋賀県立大学人間看護学研究院

住 所: 彦根市八坂町 2500

e-mail: yokoi@nurse.usp.ac.jp

厚生労働省は、COVID-19の発生に伴う医療関係職種等の各学校養成所等の対応について通知し、看護学実習は感染予防対策を講じた上で、時間短縮においても学修目標が達成されるように計画すること、実習施設の確保困難時は実習施設の変更や演習・学内実習によって必要な知識・技術の修得をして差し支えない旨の周知をはかった。そのため、看護学実習はCOVID-19の感染拡大状況と実習施設の受け入れ状況により、その都度、実習目標が達成できるように実習方法や教育方法の工夫が求められた。

とくに成人看護学実習は急性期看護、慢性期看護、終末期看護の3つの時期を含めた6単位実習であり単位数が多く、各時期の看護における学習目標を達成するため実習方法や教育方法の工夫が必要となった。このような中、2020年度よりCOVID-19禍における看護学実習の実習方法や教育方法について報告がみられるようになり、成人看護学実習についても様々な取り組みの報告がなされてきた。

今後、新カリキュラムの開始やウィズコロナに向けてCOVID-19禍で取り組まれてきた実習方法や教育方法の活用および看護学実習ガイドラインを活用して看護教育のさらなる質向上がはかれるように取り組む必要がある。そこで、本研究ではCOVID-19禍で取り組まれた成人看護学実習の報告文献や本学の成人看護学実習の実施状況から実習方法や教育方法の工夫を明らかにした。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象

2020年度からわが国で報告されたCOVID-19禍での成人看護学実習の文献と2020年度と2021年度にCOVID-19禍用に修正された本学の成人看護学実習要項および実習担当教員の記載による実習実施記録とした。

2. データ収集と方法

1) 文献の抽出

論文の検索システムは医学中央雑誌 Web版を用いて、COVID-19の感染拡大が継続している2020年から2022年(検索日2022年8月30日)までに発表された論文を検索した。検索式は、「COVID-19(コロナ)禍 AND 看護学実習 AND 成人看護学」とし会議録を除外した15文献を抽出した。そのうち看護系大学の成人看護学実習の取り組みを記載した原著論文および解説を含めた12文献を対象とした。

対象論文を「テーマ」「掲載雑誌名」「掲載年」「文献の報告目的」「報告されていた実習科目」「COVID-19禍での実習方法」「取り入れられた教育方法の工夫」についての記述内容を抽出した。文献の著者の意図すること

を十分に読み込み、第三者の助言を取り入れ主観的にならないようにした。

2) 本学の成人看護学実習および領域別実習の概要

成人看護学実習は成人クロニックケア実習(以下、慢性期実習と略す)、成人クリティカルケア実習(以下、急性期実習と略す)、エンドオブライフケア実習(以下、終末期実習と略す)の3科目で構成されている。本学の領域別実習は成人看護学実習の3科目を含め8科目の臨地実習がある。1グループ6名の12グループが8科目を7か月間(8月～2月)かけてローテーション方式で臨地実習を行っている。ローテーションの時期により実習施設は異なり複数の実習施設で実習を行っている実習科目もある。臨地実習は他校との調整で定められた時期に定められた実習施設でしか実施できず容易に実習施設を変更できない状況である。

3) 分析の視点

COVID-19禍で行われた成人看護学実習の実習科目および実習方法別に取り組まれた教育方法を抽出し、教育方法の工夫内容を看護学実習ガイドラインの指針項目と照合した。

3. 用語の定義

教育方法の工夫とは、従来の臨地実習とは異なった実習方法の中で実習目標を達成するために学生の理解を得る教育方法とする。

COVID-19禍とは、COVID-19の感染拡大で医療体制が変貌し、看護学実習も実習施設の確保ができなかったり、受け入れ実習学生の人数削減や病棟滞在時間の削減が求められたり従来の臨地実習が行えない状態とする。

4. 倫理的配慮

実習担当教員の記載による実習実施記録は、COVID-19禍用に修正された本学の成人看護学実習要項の実施状況を詳細に記載したもので、学生や患者等の個人情報や削除し実施人数や実施時間・場所、具体的な教員のかかわり内容等を記載した部分をデータとして使用した。

Ⅲ. 結果

1. 文献から抽出されたCOVID-19禍での成人看護学実習の実習方法と教育方法

1) 対象文献の概要

報告された実習方法は、大学と学生宅をつないだオンライン実習のみ(以下オンライン実習のみと略す)の報告が2件、臨地実習はなく医療施設と大学および学生宅をつないだオンライン実習と対面での学内実習の組み合わせ実習(以下オンライン・学内実習と略す)の報告が5件、制限された臨地実習を行った報告が5件であった。

急性期実習のみを報告したものは2件、慢性期実習のみを報告したものは4件であった。終末期実習のみを報告したものはなかった。また、急性期実習と慢性期実習を組み合わせ報告したものは6件であった。

2) 実習方法別の教育方法の工夫 (表 1)

(1) オンライン実習のみの実習の教育方法の工夫

オンライン実習のみの報告は、中村ら (2021 a) と中村ら (2021 b) の2件の報告であった。手術室とクリティカルケア病棟、外来化学療法室や緩和ケア病棟といった特殊な看護の場の再現を念頭に、Microsoft Teams や Zoom などの ICT を活用して看護実践を解説した視聴覚教材を提供していた。そして、受け持ち実習のように看護過程の展開が行えるように、対象者のイメージがかけられる医療映像専門業者の視聴覚教材の事例を使用したり、独自に視聴覚教材の事例の模擬カルテを作成したりしていた。また、ICT を活用して、教員の実演やシミュレーション人形を使ってオンラインで観察が行えるようにしていたり、事例の看護に活用できる栄養指導動画の作成をして配信したり疾患経験の教員の語りも配信していた。オンラインで複数の教員や学生とでカンファレンスを行っていた。中村ら (2021 b) は、実習のすべてがオンライン実習であるため実習評価の見直しも行っていった。

(2) オンライン・学内実習の教育方法の工夫

オンライン・学内実習の報告では、オンライン実習のみと同様に紙上事例で看護過程の展開を学習する方法が報告されていた。

紙上事例で看護過程を展開するにあたり、香川、渡邊、岡本 (2021) は3週間で学生一人が2事例の紙上事例を学習できるようにしたり、松本、八巻、高橋、林 (2022) は病棟患者と外来患者を同じ患者とし学生がイメージしやすいように病棟と外来に経時的なつながりをもたせ事例の看護展開を学習させたりしていた。いずれの事例も成人看護学実習で受け持つような代表的な疾患や生活状況を有している事例としていた。

情報収集の学習において、伊藤、唐津 (2022) は、意図的に必要な情報を探し出すことを目指して模擬カルテを活用し経時的な情報の追加を行っていたり、模擬患者へのインタビューを取り入れたりしていた。模擬カルテの活用は、香川、渡邊、岡本 (2021) も行っていた。

学内実習では、紙上事例の看護計画を基に、実習生2名でモデル人形を使用して保清のシミュレーションを行っていた (香川、渡邊、岡本, 2021)。また、中川、房間、浅井、森永 (2022) はフィジカルアセスメント、呼吸訓練、排泄介助、口腔ケア、離床援助、退院指導などの多くの場面のロールプレイを行っていた。嶋津、船場、小原、松田 (2021) もリフレクションを用いた演習および臨床判断能力を養う工夫を講じたロールプレイを実施し

ていた。

また、臨地実習指導者に来校を依頼し病院の説明やカンファレンスの参加など臨地実習指導者の協力を得ていた (嶋津、船場、小原、松田, 2021)。実習施設との協力を得た教育方法として、中川、房間、浅井、森永 (2022) は、実習施設から Zoom を用いて講義やグループワークでのディスカッションを行い、多職種協働やチーム医療の実際についての学習を提供していた。多職種連携について、嶋津、船場、小原、松田 (2021) は紙上事例を通して保健医療チームの連携を学ぶために理学療法士等の他の専門職教員からの講義を取り入れていた。

中川、房間、浅井、森永 (2022) は、看護過程の展開の学習において Microsoft Teams を用いて事例の情報提供を行っていたが、実習施設との通信には Zoom を用いるなど活用する ICT を使い分けていた。

(3) 制限された臨地実習における教育方法の工夫

制限された臨地実習を行った実習報告は5件あり、臨地実習日数が1日の報告が4件、4週間の内1週間を行った報告が1件であった。

行われた臨地実習1日の内容をみると、益田、小田嶋 (2020) は急性期実習で ICU の見学実習を行っていた。大鳥、鈴木、駒井、齋藤 (2021) は慢性期実習で1日の病棟実習を取り入れていた。1日の病棟実習を行うにあたり臨地実習指導者と実習前より教員と協働し学内実習を組み立てていた。その結果、臨地実習指導者は、1日の病棟実習の目標達成のためにタイムマネジメントしながら指導計画し、援助の説明をするとともに学生の知識を引き出す工夫をしていたと報告 (大鳥、齋藤, 2022) していた。

また、松浦ら (2021) は、実習途中での変更をできるだけ避けるため病棟実習は全員1日のみで、実習前に病棟実習で見学したいこと・聞きたいことについて学生にアンケート調査を行い、その結果を実習指導者と共有し実習時に活用した。さらに劇団に依頼した模擬患者を受け持つ形で看護展開を学内で行っていた。

一方、実習期間の4分の1に当たる1週間の臨地実習を行った佐佐木ら (2022) は、成人看護学実習となる実習科目を合わせて新たな実習期間を構成していた。1週間の病棟実習を企画し2週目からは学内で病棟実習事例の看護過程の展開、紙上事例の看護過程の展開、オンラインで病棟外部の専門職との講義も組み合わせる4週間の構成で実習を行っていた。

2. 本学の COVID-19 禍での成人看護学実習の実習方法と教育方法の工夫 (表 2)

1) 本学の COVID-19 禍での臨地実習の方針と成人看護学実習の実施状況

2020 年度 8 月から開始する領域別実習施設に対して 6 月に実習受け入れ状況や条件を確認したところ、全面的

表1-1 COVID-19 禍での成人看護学実習の実習方法と教育方法

著者	実習科目	実習方法	記述されていた実習方法や教育方法	取り入れられた教育方法の工夫
中村ら (2021a)	急性期、 終末期、 慢性期	オンラインのみ	手術室とクリティカルケア病棟、外来化学療法室や緩和ケア病棟といった特殊な看護の場を再現し、対象の特徴や看護実践を解説した視聴覚教材を活用していた。Microsoft Teamsを使用し、カンファレンス、記録指導、教員の補足解説を取り入れた。看護技術体験、患者体験や患者の生活を理解するための調理実習など自宅環境下で実施可能なワークを取り入れた。	<ul style="list-style-type: none"> 各時期の特殊病棟の看護の場の再現 看護実践を解説した視聴覚教材を活用した看護過程の展開 Microsoft Teamsを活用したカンファレンスや指導 患者生活を理解するための自宅での実践可能な生活活動のワーク
中村ら (2021b)	急性期、 慢性期	オンラインのみ	受け持ち実習に近づけるため、効果的な看護過程理解と事例イメージ化を考え実施した。対象者をイメージできるように「看護のためのアセスメント事例集」を使用し模擬カルテを作成した。急性期受け持ち看護遠隔実習は胃がん患者事例を、慢性期受け持ち看護遠隔実習は呼吸不全患者事例を使用した。事例イメージ充実のために、視聴覚教材とその映像に連動した電子カルテ、教員の実演、シミュレーター人形を使ったオンラインでの観察を行った。実習事例の特徴によって、管理栄養学部と連携して作成した栄養指導動画や疾患経験教員の語りを配信した。人間関係の構築として複数教員や学生間でオンラインによるカンファレンスの再現をした。実習評価の項目を見直しを行った。	<ul style="list-style-type: none"> 受け持ち実習のように事例提供をして看護過程の展開 対象者のイメージ化を図るために市販の視聴覚教材を活用 視聴覚教材の事例の模擬カルテの作成 教員の実演やシミュレーション人形を活用したオンラインでの観察 管理栄養学部と連携した栄養指導動画の作成 疾患経験の教員の語りの配信 複数教員によるカンファレンス 実習評価の見直し
香川ら (2021)	慢性期実習	オンライン実習	3週間で2事例の事例の看護過程を展開する。実習生2名でモデル人形で保清のシミュレーションを行った。シミュレーション、ロールプレイを中心とした対面授業と動画によるオンライン学習を組み合わせたブレンディッドラーニングによる実習を計画した。実習評価は、ルーブリック評価表を用いた実習生の自己評価と教員評価、評価面接後に担当教員会議で決定した。	<ul style="list-style-type: none"> 2事例の紙上事例の看護過程の展開 実習生2名でモデル人形で保清のシミュレーション シミュレーション、ロールプレイを中心とした対面授業 動画によるオンライン学習 ルーブリック評価表を用いた実習生の自己評価と教員評価
松本ら (2022)	急性期実習	オンライン1日実習	オンライン病棟実習5日、オンライン外来実習2日、学内演習1日とした。オンラインがん看護実習1日、学習のまとめ1日に再編した。学生3~4名を1グループとした。グループで看護問題全体発表会の資料を作成して発表した。事例は1事例とした。看護展開は、事例患者を担当し学習した。学生は病棟実習で1人の成人を担当したのち、外来で数年経った同一成人に再会し、外来実習でも担当するという設定とした。オンラインで実施した教員との模擬患者演習は、学生の実践場面を録画した。	<ul style="list-style-type: none"> グループ学生数の調整 グループで1名の紙上事例の看護過程の展開 病棟看護と外来看護の関連を理解するための事例の設定 教員が模擬患者となつての演習 演習の録画による振り返り
伊藤ら (2022)	急性期、 慢性期	学内実習	従来の4週間実習に近い体験ができるようにプログラムした。 ①様々な情報源から意図的に必要な情報を探し出すこと、②経時的に患者情報が追加され状態が変化していくこと、③患者の状態をイメージできるようにモデル人形や映像、インタビューによる視覚的情報を用いること、④学生が立案した計画や看護実践をその都度振り返り評価することを体験できる。 以上の内容として、疑似カルテ、模擬患者へのインタビュー、術後モデル人形を用いた観察、動画視聴を通じた情報収集、術後の行動計画立案と振り返り、看護過程の展開、退院指導計画の立案・実施・評価を行った。 個人ワークとグループワーク、ロールプレイを用いた。	<ul style="list-style-type: none"> 疑似カルテの活用 模擬患者へのインタビュー、術後モデル人形を用いた観察、動画視聴を通じた情報収集 術後の行動計画立案と振り返り 紙上事例の看護過程の展開 退院指導計画の立案・実施・評価 個人ワークとグループワークの使い分け ロールプレイの実施
嶋津ら (2021)	慢性期実習	オンライン実習	学生が実習目標を達成し看護師と必要な対象理解を深めるため、学内実習におけるリフレクションを用いた演習及び臨床判断能力を養う工夫を講じたロールプレイを実施した。 ①看護過程の展開とクリティカルシンキングの連動、②紙上事例の受け持ち患者としての認識強化、③臨床判断能力の育成を目指して、1週目に紙上事例の看護上の問題点の抽出、2週目に看護計画の立案・演習を実施、3週目に自己の看護を振り返りを行った。 臨床実習指導者に来校依頼し病院の説明やカンファレンスの参加や保健医療チームと連携では、紙上事例について理学療法学科の教員が講義をした。	<ul style="list-style-type: none"> 紙上事例の看護過程の展開 リフレクションを用いた学内演習 臨床判断を養う工夫をしたロールプレイ 来校した実習指導者とのカンファレンス 紙上事例について他職種の教員からの講義
中川ら (2022)	急性期、 慢性期	オンライン実習	実習施設との連携を保ちながら実習目標を達成できるように、ハイブリット型成人看護学実習を導入した。Teamsを用いて患者情報を提供し臨床判断モデルに基づいて看護過程の展開をした。フィジカルアセスメント、呼吸訓練、排泄介助、口腔ケア、離床援助、退院指導のロールプレイを実施し中範囲理論を用いた意味付けをした。多職種協働とチーム医療の実際は、実習施設からZoomを用いた講義とグループワークやディスカッションをした。	<ul style="list-style-type: none"> Microsoft Teamsを用いて患者情報を提供し看護過程の展開 事例のフィジカルアセスメント、呼吸訓練、排泄介助、口腔ケア、離床援助、退院指導のロールプレイ 中範囲理論を用いた意味付け 実習施設の指導者とZoomを用いた講義とグループワークやディスカッション

表 1-2 COVID-19 禍での成人看護学実習の実習方法と教育方法

著者	実習科目	実習方法	記述されていた実習方法や教育方法	取り入れられた教育方法の工夫
益田ら (2020)	急性期実習	ICUに1日見学実習	ICUの見学実習以外はpaper patientsを進め看護過程を展開した。1シナリオはZoomで教員と一緒にバーチャル・シミュレーションを行ったが、残りの4シナリオは自己学習とした。シナリオ実施後はディフリーフィングを行った。	<ul style="list-style-type: none"> ・ICUの見学実習 ・紙上事例の看護過程の展開 ・1シナリオはZoomで教員と一緒にバーチャル・シミュレーションの実施 ・4シナリオは自己学習 ・シナリオ実施後はディフリーフィングの実施
大鳥ら (2021)	慢性期実習	病棟実習は1日	病棟1日実習でも本来の実習目的・目標を達成できる方法であること、「臨地実習指導者と教員の協働による実習指導」を重点課題として学内実習を組み立てた。具体的には「病棟実習前の病棟オリエンテーション」「入院患者の看護過程展開の指導」「学内における看護実践」「個人発表」等を実習指導者と実施した。	<ul style="list-style-type: none"> ・実習指導者と学内実習の組み立て ・実習指導者による病棟実習前の病棟オリエンテーション ・入院患者の看護過程展開の指導 ・学内における看護実践 ・個人発表に対して実習指導者の参画
大鳥ら (2022)	慢性期実習	病棟実習は1日	1日の病棟実習の目標達成のために、臨地実習指導者は、タイムマネジメントしながら指導計画し、援助の説明をするともに学生の知識を引き出す工夫をしていた。	<ul style="list-style-type: none"> ・実習指導者と考えた病棟1日実習 ・臨地実習指導者がタイムマネジメントした臨地実習
松浦ら (2021)	術前から入院までの実習	病棟実習は1日	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習途中での変更をできるだけ避けるため、病棟実習は全員1日のみで、1日に1グループ3名×4つの病棟に分かれて実施し、学生が患者を受け持たない実習とした。 2. 実習前に病棟実習で見学したいこと・聞きたいことについて学生にアンケート調査を行い、その結果を実習指導者と共有し実習時に活用した。 3. 看護過程の展開は、1クールごとに異なる事例を作成し、劇団に依頼した模擬患者を受け持つ形で行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習途中での変更を避ける ・1グループ3名×4つの病棟に分かれて実施 ・学生が患者を受け持たない病棟実習 ・実習前に学生に病棟実習に対する学生にアンケート調査を実施 ・アンケート調査結果を実習指導者と共有し実習時に活用 ・看護過程の展開は1クールごとに異なる事例を作成 ・劇団に依頼した模擬患者を受け持つ
佐佐木ら (2022)	成人看護学の実習を合わせた実習	4週間の病棟実習は1週間	1週間の病棟実習、病棟実習事例の看護過程の展開、紙上事例の看護過程の展開、リモートでの病棟外部部門のオンライン講義を組み合わせて4週間を構成した。病棟実習が行える人数にグループ編成を行った。病棟実習以外では、オンラインと対面を組み合わせ、ディスカッションや発表の機会を毎日確保し、tutoring効果や協同学習による学習効果が得られるように実施した。	<ul style="list-style-type: none"> ・1週間(4分の1)の病棟実習事例の看護過程の展開 ・紙上事例の看護過程の展開 ・病棟外部部門の方とオンライン講義 ・病棟実習が行える人数にグループ編成 ・病棟実習以外ではオンラインと対面の組み合わせ ・ディスカッションや発表の機会を毎日確保

に実習受け入れを中止する施設もあれば日数や人数制限等の条件下で実習を受け入れる施設も複数あった。本学は、実習受け入れ可能な施設に実習学生人数を変更し、実習施設が提示した条件下で従来通りのローテーション方式で臨地実習を行うこととなった。そのため、各実習科目は、感染拡大状況が変化することも念頭にオンライン・学内実習計画と制限下の臨地実習計画を起案して、その時期の実習施設の状況に合わせて実習を行うこととなった。

成人看護学実習で制限された臨地実習を行った学生の割合をみると、2020年度は急性期実習で25%、慢性期実習で55%、終末期実習で100%、2021年度は急性期実習で74%、慢性期実習で58%、終末期実習で74%の学生が臨地実習を行うことができていた。しかし、臨地実習がなく遠隔・学内実習だけで実習科目を履修した学生も存在した。

2) 実習方法別の教育の工夫

(1) オンライン・学内実習での教育方法の工夫

急性期実習においては、急性期(周術期)にある患者の代表的な紙上事例をグループごとに1名提示して看護過程を展開した。学内実習3日間を、術前日・術当日・術後1日目と設定し、回復過程に沿ったシミュレーションを実施した。また、学生がより現実的な学習できるよう紙上事例は実習指導者の協力を得て作成した。さらに、教員が電子カルテに模したノートパソコンに回復過程に合わせて情報を追加し、学生は毎朝パソコンから情報収集することから実習を開始するなどの工夫を行った。毎日、実習開始時にはグループで思考を共有して整理し、実習終了時にはカンファレンスを行い振り返りを強化した。

慢性期実習においては、臨地実習を行う実習病棟の代表的な慢性疾患患者の紙上事例をグループに1名提示し

表2 COVID-19 禍での本学の成人看護学実習の実習方法と教育方法

実習科目	実習方法	記述されていた実習方法と教育方法	取り入れられた教育方法の工夫
急性期実習	臨地実習なしのオンライン・学内実習	急性期(周術期)にある患者の代表的な紙上事例をグループごとに1名提示して看護過程を展開した。 学内実習3日間を、術前日・術当日・術後1日目と設定し、回復過程に沿ったシミュレーションを実施した。 また、学内実習であっても学生がよりリアルな状況で学習できるよう、紙上事例は実習指導者の協力を得て作成した。 さらに、教員が電子カルテに模したノートパソコンに回復過程に合わせて情報を追加し、学生は毎朝パソコンから情報収集することから実習を開始するなどの工夫を行った。 そして、実習開始時にはグループで思考を共有して整理し、毎日の実習終了前にはカンファレンスを行い、振り返りを強化した。	代表的な紙上事例をグループごとに1事例の看護過程を展開 ・術前日・術当日・術後1日目の看護のシミュレーション ・紙上事例は実習指導者の協力を得て作成 ・ノートパソコンに模擬カルテを作成して情報提供 ・パソコンの模擬カルテから情報収集して毎日の実習開始 ・毎日、グループで思考を共有して整理する ・カンファレンスで振り返りの強化をはかり毎日の実習を終了
慢性期実習	臨地実習なしのオンライン・学内実習	グループの実習病棟であった代表的な疾患の紙上事例を1名提供し看護過程を展開した。 毎日、変化の追加情報を準備し、個々の学生の質問に応じて情報提供した。 個別に看護計画を立案した後、グループで患者像のイメージと作成した看護計画を共有した。 実習指導者に来校を依頼し、紙上事例の看護計画について臨床状況をふまえて助言を得た。 看護計画の中からシミュレーション場面を学生が選択し3日間個別にシミュレーションを行った。 患者会の方とZoomで入院と退院後の生活について学生とコミュニケーションを行った。	・実習病棟での代表的な紙上事例1名の看護過程を展開 ・学生の質問に応じて情報提供 ・個別に看護計画の立案後、グループで患者像や看護計画の共有 ・来校した実習指導者から得る紙上事例の看護計画への助言 ・看護計画の中から学生が選択したシミュレーション場面のシミュレーションを個別に実施 ・患者会の当事者とオンラインでコミュニケーション
終末期実習	臨地実習なしのオンライン・学内実習	代表的な終末期患者の紙上事例1名を全員が個別に看護過程を展開した。 終末期患者に対するコミュニケーションのロールプレイや苦痛を中心としたフィジカルアセスメントのシミュレーションを学生一人ずつ行い、オンラインで実習指導者も参加した。 また、オンラインで実習施設の臨床心理士やチャプレン、緩和ケア認定看護師等から講義やテーマに対してのディスカッションを行った。	代表的な終末期患者の紙上事例1名の看護過程を展開 ・終末期患者に対するコミュニケーションのロールプレイ ・苦痛を中心としたフィジカルアセスメントのシミュレーション ・ロールプレイやシミュレーションに対して実習指導者はオンライン参加 ・実習施設の臨床心理士やチャプレン、緩和ケア認定看護師等からオンラインで講義やディスカッションの実施
急性期実習	病棟実習は3日	従来の実習施設の内、受け入れ可能な実習施設に変更した。 一人3日間は臨地実習ができるように、6名を病棟と学内チームに分けた。 病棟実習は術後患者の看護見学実習として3日間実施した。 学内は、術後患者のシミュレーションとデブリーフィングを行った。 1週目と2週目は病棟チームと学内チームを入れ替えた。	・従来の実習施設で受け入れ可能な施設に変更 ・病棟と学内チームに分け一人3日間の臨地実習 ・病棟実習は術後患者の看護見学実習のみに限定 ・学内での術後患者のシミュレーションとデブリーフィング ・1週ごとに病棟チームと学内チームの入れ替え
慢性期実習	病棟実習は7日	従来の慢性疾患患者が多い病棟で実習した。 学生1名が一人の患者を受け持ち看護過程を展開した。 <2020年度から改善した2021年度の内容> 病棟に滞在する学生は最大3名までとし、残りの3名は病院内の別室で事前事後学習を行う。午前と午後チームに分けた。 受け持ち患者も同意の得られた方とし、成人期老年期を問わないとした。 学内実習では受け持ち患者に対して病みの軌跡理論を用いて慢性期看護を再考した。 実習指導者の来校は可能な範囲で行った。	・学生1名が一人の患者を受け持ち看護過程を展開 ・人数制限内(最大3名まで)での病棟実習 ・2チームで時間差を設けて病棟実習 ・病棟実習外の学生は別室で事前事後学習 ・同意を得るため受け持ち患者は成人期老年期を問わない ・学内発表に対して可能な範囲で実習指導者の来校を依頼
終末期実習	病棟実習は8日	従来の緩和ケア病棟・ホスピスで実習した。 終末期実習においては、従来の日程で一人1名の受け持ち患者をもった臨地実習を行った。 <2020年度から改善した2021年度の内容> 病棟やナースステーションで滞在する学生が4名以上にならないように、別室で待機している学生と交代した。 施設状況に応じて可能な範囲でベッドサイドに行き看護実践を行った。 受け持ち患者ケアのために病棟滞在する学生は、実習指導者がスケジュールを表示して学生や教員が調整した。	・従来の緩和ケア病棟・ホスピスで実習 ・従来の日程で一人1名の受け持ち患者をもった臨地実習 ・人数制限内(最大3名まで)での病棟実習 ・看護ケアや見学に応じて別室待機の学生と交代を調整 ・施設状況に応じて可能な範囲でベッドサイドで看護実践 ・実習指導者の協力を得て病棟滞在スケジュールの調整

て看護過程を展開した。従来から実習指導者に来校の依頼をして理論活用をした実習の振り返りを行っていたこともあり、COVID-19 禍の学内実習においても来校の依頼をして看護計画の発表、看護ケアのシミュレーションへの参加を得て指導や臨床状況の体験情報の協力を得た。さらに、紙上事例では患者とのコミュニケーションが体験できないため、患者会の協力を得てオンラインで当事者から入院時や退院後の生活についての語りを得たり、オンラインでコミュニケーションする時間を設けたりした。

終末期実習においては、代表的な終末期患者の紙上事例 1 名を全員が個別に看護過程を展開した。終末期患者に対するコミュニケーションのロールプレイや苦痛を中心としたフィジカルアセスメントのシミュレーションを学生一人ずつに行い、実習指導者にはオンラインでの参加協力を得た。また、オンラインで実習施設の臨床心理士やチャプレン、緩和ケア認定看護師等からの講義やテーマに対してのディスカッションを行った。

(2) 制限された臨地実習における教育方法の工夫

急性期実習においては、臨地実習の初日は ICU ならびに手術室見学実習（従来よりも短時間）を行い、学生が急性期の特殊な環境を体験できるようにした。また、人数制限のため 1 週目に 3 日間、2 週目に 3 日間病棟実習を行うグループに分け、急性期の特徴的な場面を中心に、観察やケア見学および一部ケアの実施を行った。学内では術後患者のケアに対するシミュレーションを行った。

慢性期実習においては、従来の日程で一人 1 名の受け持ち患者をもった臨地実習を行ったが、病棟での人数制限のため、午前チームと午後チームに分かれて病棟実習を行った。病棟実習でない学生は病棟外の別室で事前事後学習を行った。

終末期実習においては、従来の日程で一人 1 名の受け持ち患者をもった臨地実習を行ったが、病棟やナースステーションで滞在する学生が 4 名以上にならないように別室で待機している学生と交代した。施設の状況に応じて可能な範囲でベッドサイドに行き看護実践を行った。受け持ち患者ケアのために病棟滞在する学生は、実習指導者がスケジュールを表示して学生や教員が調整した。

IV. 考 察

1. COVID-19 禍で行われた成人看護学実習の教育方法の工夫

COVID-19 感染症の感染拡大前に新カリキュラムの開始に向け看護学実習ガイドラインが作成された。この看護学実習ガイドラインでは、「病院、施設、在宅、地域

等の多様な場において、多様な人を対象として援助することを通して、学生が対象者との関係形成を中核とし、多職種連携において必要とされる連携・協働能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目指す」と示されており、成人看護学実習は、主に病院の病棟や外来等で治療を受けている多様な人々を対象として、急性期看護や慢性期看護、終末期看護を学び学修目標を達成する。

成人看護学実習の対象者は医療負担の大きいクリティカルケア領域や感染症リスクの高い対象者であるため、COVID-19 感染症の感染拡大により臨地で学生が対象者から学ぶ機会が減少した。そのため、看護専門職としての能力を身に付けることを目指して、実習方法を変更し教育方法を工夫して学生に提供することとなった。

他者との対面ができないオンライン実習のみで工夫されていたことは、ICT を活用して成人看護学実習の実習目標に応じた医療映像専門業者の視聴覚教材を活用し、学生が具体的なイメージを抱ける工夫であった。紙上で看護過程の展開を行うために、事例をイメージしやすい視聴覚教材の選出をしたり、臨床と同じようにカルテから情報収集できるように独自の模擬カルテを作成したりしていた。また、教員の実演やシミュレーション人形を使ってオンラインでも観察ができる工夫をしていた。対面での学習が困難な状況では、ICT を活用しオンラインで観察してほしい画面の情報提供をしたり複数の人とコミュニケーションしたりして観察力やコミュニケーション力を鍛える工夫をしていたと考える。

ICT の活用においては、大学側も学生側も通信環境が十分整っていない中で使用する視聴覚教材の選択や通信環境に応じた教材の熟成が必要であった。視聴覚教材は、提供側の意図によって場面の選択が行われ学習者の視聴覚が中心となった情報となる。学習者が得たい情報を自ら収集したり視聴覚以外の情報収集や対象者を取り巻く環境全体の観察をしたりすることが困難である。オンラインでの観察は、COVID-19 禍でオンライン診療が行われてきたことから重要な技術となる。ICT を活用したオンラインで何を見聞き判断していくのか、また対象者とオンラインでどのようにコミュニケーションしていくのか、オンラインで可能な観察力やコミュニケーション力を高める教育が今後必要となってくると考える。模擬カルテにおいては、学生に活用してほしい情報を記載しておくだけでなく、学生が多くの情報から必要な情報を選択しアセスメントに必要な情報を追加収集できる模擬カルテの教材が必要と考える。COVID-19 禍は、看護学実習において ICT を活用した教育への取り組みを加速したものと考える。

臨地実習がなくても他者との対面が可能なオンライ

ン・学内実習で工夫されていたことには、提供された紙上事例の看護に関係した様々な場面でのロールプレイやシミュレーションを行い、その振り返りを重視する教育であった。シミュレーション教育は、実際に遭遇する臨床場面や実践的な経験を再現することで、患者を危険にさらすことなく個人のスキルやチームのスキルを洗練することができるとして看護教育の中に取り入れられてきている。シミュレーションには人形や学生・教員をモデルとするだけでなく、松浦ら（2021）の報告のように演技の専門家である劇団に模擬患者を依頼するなど現実的なシミュレーションが行える工夫をしていたと考える。

また、本学のように学内でのシミュレーションやロールプレイに実習指導者の参加を依頼したり、中川、房間、浅井、森永（2022）の報告のように実習施設から Zoom を用いて講義やグループワークへの参加協力を得た工夫は、学内実習でも臨地実習と同様に学生が実習指導者と交わり実際の看護を知る機会であった。またオンラインでの交流は、実習施設の他職種だけではなく、本学のように患者会の当事者との交流もあり、COVID-19 禍で制限された人間関係を拡大する工夫であったと考える。COVID-19 禍での学内実習において実習指導者の参加協力を得たことは、医療現場の実践的な情報を得るだけでなく、学生が教員以外の看護職と交流し看護チームの一員としての自覚を体得する機会であったとも考える。このことをきっかけに、COVID-19 禍においても学生の実習学習を支援してくれる実習指導者や患者体験者等の存在が、学生の看護専門職としての自己研鑽につながっていくと期待したい。

制限された臨地実習において最も必要視され工夫されたことは、実習指導者との連携・協力であったと考える。従来の日数やグループ人数では実習が困難なため、臨地実習で学べることは何か何を学ばせたいのかを明らかにして、教員と実習指導者が話し合いを重ね実習スケジュールを進めることが求められた。臨地実習の内容について、実習前に学生にアンケート調査を行い実習指導者と結果を共有し実習時に活用した報告（松浦ら、2021）や1日の病棟実習を行うにあたり臨地実習指導者と実習前より教員と協働し学内実習を組み立てていた報告（大鳥、鈴木、駒井、齋藤、2021）のように実習指導者との連携・協力は強化されていた。

また、制限された臨地実習では佐佐木ら（2022）の報告のように、成人看護学実習で複数ある実習科目（急性期実習、慢性期実習、終末期実習）を合わせて新たな実習を構成するなど、成人看護学実習領域内で協力し合い、社会状況や学習環境によって新たな方法を取り入れて臨機応変に対応する工夫も必要であると考えられた。

このように COVID-19 禍において成人看護学実習は、対面での受け持ち実習ができない場合は紙上事例で看護

過程を展開し、ICT を活用してオンラインで観察力やコミュニケーション力を鍛える工夫をしたり、学内で様々なシミュレーションを実施したりして看護の思考や実践力を鍛えていた。また、実習指導者や実習施設の他職種とオンラインや対面で協力を得ながら臨床の状況を学べる工夫を行っていたことが明らかになった。

2. COVID-19 禍での取り組みと看護学実習ガイドラインを活用していく本学の課題

COVID-19 禍以前に、わが国の看護系大学の臨地実習の課題の対策として看護学実習ガイドラインが作成され指針が示された。COVID-19 禍で取り組まれてきた実習方法や教育方法の工夫と看護学実習ガイドラインの指針を活用し本学の課題を検討する。

「指導の体制づくり」については、大学教員と実習指導者等による連携・協働を重視した指針が看護学実習ガイドラインで示されている。本学は従来の実習より実習指導者には来校の依頼をして（横井、前川、本田、米田、奥津、2012）、実習のまとめのディスカッションや実習評価について協力を得ていた。このこともあり、今回の学内実習への協力は得られやすく制限下での臨地実習の導入においても受け持ち患者選定やシャドウイングの場面設定の協力が得られたと考える。COVID-19 禍での実習における協力を機会に、さらに実習指導者と連携を深め学生が臨地実習で効果的な学びができるようにも考えていきたい。

「看護学実習における倫理および安全管理に関する調整」については、従来の医療関係者のためのワクチンガイドラインを基にした感染予防対策だけでなく、COVID-19 禍では行政機関が提供している COVID-19 対策が追加されていくこととなる。また、COVID-19 禍では ICT を活用してオンライン実習が多く取り入れられたことから、ICT を活用しての看護学実習では今まで以上に情報倫理に対する教育の強化が必要と考える。

「看護学実習前の調整」においては、COVID-19 禍で実習施設の受け入れ状況の確認や指導体制で多くの調整が行われた。COVID-19 禍のように急激に変化し制限がかかる医療情勢の中で、看護学生に貴重な臨地実習で何を学ばせていくのかを検討したように、実習前から実習指導者と教員との連携の強化と協働した調整が今後も必要と考える。

また、COVID-19 禍での実習開始前の学生への支援として、学生の健康管理や感染予防対策など通常の実習とは異なった実習準備の支援が必要とされた。看護系大学では臨地実習や学修面でのストレスを感じている学生が多く COVID-19 の状況で悪化する可能性があるという報告（安部、下司、福地、2021）されている。本研究は COVID-19 禍での実習方法や教育方法の工夫に着眼した内容の抽出であったためか、実習前や実習中での学生

のストレス緩和に対する教育の工夫の報告は見当たらなかった。しかし、本学のように実習施設や地域の感染状況に応じて制限下の臨地実習と臨地実習なしのオンライン・学内実習が切り替わって行われることは、学生にストレスを与えていたと考えられる。今後、COVID-19 禍での実習における学生のストレス状態を把握し、実習の学修目標の達成とともに学生のストレス緩和に向けた取り組みも必要であると考えられる。

「ケアへの参画における指導方法」については、COVID-19 禍では最も困難な教育的なかかわりであった。看護学実習ガイドラインでも示されているように、看護学実習は学生が看護過程に基づき適切な看護ケアを提供することを学修することであるが、COVID-19 禍では看護ケアの提供が困難であった。そのため学内実習においては、実習指導者を交えて看護過程の思考を鍛えたり臨地実習で遭遇される場面でのロールプレイやシミュレーションを行って、学生の看護ケアへの実践力を鍛えたりしていた。この指導においても COVID-19 禍の看護学実習では、教員と実習指導者と連携・協働による指導方法の強化なされたものと考えられる。

看護学実習ガイドラインで示されている実習施設や実習指導者との連携・協働は、COVID-19 禍の実習で強化されてきたこともあり、今後も連携・協働した教育を行っていく。看護学実習ガイドラインの指針に加えて、COVID-19 禍では、ICTを活用した看護学実習が多く行われたことから実習で取り扱う情報に対して情報倫理の教育を強化したり、従来の実習とは異なった COVID-19 禍の実習で生じる学生のストレスにも配慮した教育の工夫が必要と考えられた。

VI. 結 論

COVID-19 禍において成人看護学実習は、対面での受け持ち実習ができない場合は紙上事例で看護過程を展開し、ICTを活用してオンラインで観察力やコミュニケーション力を鍛える工夫をしたり、学内で様々なシミュレーションを実施したりして看護の思考や実践力を鍛える工夫をしていた。また、実習指導者や実習施設の他職種とオンラインや対面で協力を得ながら臨床の状況を知る工夫を行っていたことが明らかになった。

今後、看護学実習ガイドラインの活用と COVID-19 禍の実習で生じた課題に取り組み、新カリキュラムの開始とウィズコロナの中で看護教育の質向上を目指していく。

文 献

- ・安部聡子, 下司映一, 福地本晴美 (2021). 看護系大学生のストレス要因と学生支援. *ストレス科学*, 35(4), 290-301.
- ・伊藤加奈子, 唐津ふさ (2022). COVID-19 流行下における成人看護学実習学内代替実習プログラムの評価. *北海道医療大学看護福祉学部学会誌*, 18 (1), 65-74.
- ・香川将大, 渡邊美和, 岡本佐智子 (2021). COVID-19 禍の成人看護学実習 I (急性期) におけるブレンディッドラーニングの実践報告. *東都大学紀要*, 11 (1), 51-60.
- ・厚労省医政局看護課 (2020). 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について. <https://www.mhlw.go.jp/content/000642611.pdf> (最終閲覧 2022 年 9 月 26 日)
- ・益田美津美, 小田嶋裕輝 (2020). バーチャル・シミュレーションを用いたハイブリッド型成人看護学実習の取り組み. *医学教育*, 51 (5), 557-560.
- ・松本文奈, 八巻真紀子, 高橋奈津子, 林直子 (2022). コロナ禍におけるオンラインと学内演習を組み合わせた成人看護学実習 (慢性期) の実践報告. *聖路加国際大学紀要*, 8, 133-138.
- ・松浦江美, 三浦沙織, 大山祐介, 橋爪可織, 山田絵理佳, 岩崎香代子, いけうちしん, 湯川純子, 戸北正和, 西口真由美, 岡田みずほ, 小淵美樹子 (2021). 大学・病院・模擬患者の連携による COVID-19 に対応した成人看護学実習 I の取り組み. *看護教育*, 62 (9), 882-886.
- ・中川ひろみ, 房間美恵, 浅井直子, 森永聡美 (2022). 新型コロナウイルス感染症パンデミック禍におけるハイブリッド型成人看護学実習に関する実施報告. *宝塚大学紀要*, 35, 139-145.
- ・中村織恵, 佐々木純子, 永海雄太, 外館真理子, 荒木玲子, 須田利佳子 (2021 a). コロナ禍における成人看護学実習 (第 2 報) 成人期にある対象への看護を遠隔実習で理解するための取り組み. *東都大学紀要*, 11 (1), 73-83.
- ・中村織恵, 佐々木純子, 永海雄太, 外館真理子, 荒木玲子, 須田利佳子 (2021 b). コロナ禍における成人看護学実習 (第 1 報) 専門性ある看護実践の場を遠隔実習で再現する. *東都大学紀要*, 11 (1), 61-71.
- ・日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分会 (2017). 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準, 看護学分野. <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-h170929-9.pdf> (最終閲覧 2022 年 9 月 26 日)
- ・日本看護系大学協議会 (2018). 看護学士課程教育に

- におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標. <http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf> (最終閲覧 2022 年 9 月 26 日)
- ・日本看護系大学協議会看護学教育向上委員会資料 (2019). 看護学実習ガイドライン. https://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt_igaku-00126_1.pdf (最終閲覧 2022 年 9 月 26 日)
 - ・大鳥和子, 齋藤みどり (2022). コロナ禍における成人看護学実習 I (慢性期看護実習) (第 2 報) 学内実習を主体とした代替実習の効果. 了徳寺大学研究紀要, 16, 205-218.
 - ・大鳥和子, 鈴木由紀子, 駒井里枝, 齋藤みどり (2021). コロナ禍における成人看護学実習 I (慢性期看護実習) 臨床実習指導者と教員の協働による実習指導の取り組み (第 1 報). 了徳寺大学研究紀要, 15, 39-48.
 - ・佐佐木智絵, 井上菜穂美, 伊藤ふみ子, 穴水千尋, 田中秀子, 岩崎紀久子 (2022). 新型コロナウイルス (COVID-19) 感染拡大下におけるリモート実習を取り入れた実習の展開 成人看護学実習 II (慢性期・終末期), 成人看護学実習 III (急性期・回復期) における試み. 淑徳大学看護栄養学部紀要, 14, 77-87.
 - ・嶋津佑亮, 船場清三, 小原理恵子, 松田真紀子 (2021). COVID-19 禍における成人看護学実習 II の報告 学内・オンライン実習から考える今後の実習の在り方. 東都大学紀要, 11 (1), 103-108.
 - ・横井和美, 前川直美, 本田可奈子, 米田照美, 奥津文子 (2012). 成人看護学実習における実習指導者参加型の技術演習に対する実習指導者からの評価. 日本看護学教育学会誌, 21 (3), 49-57.